

出張報告書

令和元年 7月10日

会派名 民主市民ネット

会長 山田庫司郎 様

出張者氏名 平賀貴幸



下記のとおり出張したので報告します。

記

出張期間		令和元年 年 7月 4日(木) ~ 令和元年 7月 8日(月) [5日間]					
出張概要	①	月日	7月4日	市町村名	根室市	会場	北方四島交流センター
		目的	北方四島交流訪問事業				
		テーマ	ビザなし交流に参加するための手続きと事前学習				
	②	月日	7月5日	市町村名	北方領土	会場	エトピリカ及び色丹島
		目的	北方四島交流訪問事業				
		テーマ	色丹島視察研修				
	③	月日	7月6日	市町村名	北方領土	会場	エトピリカ及び色丹島
		目的	北方四島交流訪問事業				
		テーマ	色丹島視察研修				
	④	月日	7月7日	市町村名	北方領土	会場	エトピリカ及び択捉島
		目的	北方四島交流訪問事業				
		テーマ	択捉島住民との交流と、住民宅へのホームビジット				
所見	別紙のとおり						
備考							

※所見については、別紙(任意様式)で作成して下さい。

令和元年北方四島ビザなし交流参加報告書

網走市議会議員・全国若手市議会議員の会 OB 会
平賀貴幸（団員番号 23 番）

1992 年から開始され、本年で 28 年目を迎える北方四島交流訪問事業に 7 月 4 日から参加させていただきました。今回の訪問は北方領土返還要求運動連絡協議会主体の訪問団（児玉泰子団長）で、最初に 7 月 4 日根室市の北海道立北方四島交流センターにて今回のビザなし交流参加者が集まり事前研修及び結団式に出席しました。

翌日、7 月 5 日根室港から多くの根室の方々やメディアなどに見送られながら「えとぴりか」に乗船。同日国後島の古釜布湾について入域手続きを終えた後、その後色丹島へ向かいました。

色丹島に到着後、クリルスキルィバク支社にて稼働中の飼料用の魚粉ミールの工場の視察を実施。この工場ではスケトウダラを主な原料に飼料を製造しており、含有プロテインの量増加が可能な設備が導入されていました。材料は魚の残渣で 1 時間 6.5 トン、1 日 120 から 130 トンの原料を処理する能力があり、副産物として最高品質の魚油も採れるとのこと。また施設の建設には欧州企業が携わったとのことと外国資本のかかわりもあることがわかりました。

続いて、完成間近の工場を視察。新工場には 5 台の魚を切るドイツ製の機械が 5 台、タラのピレをつくる機械が 1 台設置され、肝臓(キモ)、魚卵、白子の加工も想定されているとのことでした。（この工場がおそらくは安倍首相との会談前にプーチン大統領がメッセージを寄せたところだと思われます）

また、冷凍保存については冷凍機が 12 台で最大 120 トンの冷凍保存が可能であり、製品冷凍のほか、加工前の原料保管にも活用する予定とのことでした。設備は 80 パーセントがオートメーション化されており、人がいる場所は仕分け作業などに限定されていることや、8800 トン保存可能な倉庫のほか、冷蔵庫も 5000 トンの容量が稼働後は使用できるようになること。（これまでの施設の冷蔵庫の 2000 トンある）

完成後は、従来の工場の加工で 300 トン、新工場で 900 トン(原料は 1200 トン)の製品加工が可能になるとのことでした。

次に労働者についての説明では、これまでの工場からの継続雇用に加えて新たに雇用すること、オートメーションシステム運用の専門家をアイスランドから少し雇用することがわかり、全体で 400 名くらいの方が従事する工場だということがわかりました。

また労働者の大半は島民とのことですが、出稼ぎ（北朝鮮からは来ていない）もあり、人員不足の場合はロシアの国中から集めるということ、アルメニア人もいるが外国人という感覚は少ないとの説明がありました。

次に原材料の確保体制については、原料は現地の漁で採れたものを活用しており、自社で450トン2台、1000トン1隻、200トン2隻いずれもトロール船を4隻保有していること。そのうち、ノルウェー製の新船は、採った魚を水につけたままで傷つけずに持ってくるのが可能で商品価値を下げずに済むことや、パートナー企業の巻き網漁船が8隻あること。

さらに、缶詰工場が別途あり、各種製品の出荷先は主にロシア国内。工場の HACCP 対応は今のところないが将来的には可能性があること、電力の確保のために追加で発電システムもつくっており、完成後は8MWの能力を保有することになることもわかりました。

また、出稼ぎ労働者(季節労働者)のための寮を設置しており、通常は半年ほどだが労働契約を伸ばすこともあり、現在新たに216室を整備しているとのことでした。

福利厚生面でもバレーコートなど、スポーツ施設も設置するなどの対応を進めていること。加工に携わる労働者は8万から9万ルーブルの給与(専門家はもっと高い。)であること。24室のアパートが別に専門家のために用意されているそうです。

視察終了後は、「ウートラローズナ」という名前の色丹島の文化会館に移動。到着すると民族衣装を着た女性がパンを持って出迎えて歓迎してくれました。歓迎会にはウーソン南クリル地区副地区長らが出席。同氏からは「27年色丹島にみなさんを受け入れているし、私たちも受け入れてもらっている。お互いに沢山の友人があり、顔が浮かぶと思う。みなさんとお会いする時には友情に満ちた嬉しい出会いになる。今日もお会いできて嬉しい。島で楽しく過ごしてもらい、いい思い出が残るようにと思っている。」とあいさつがありました。

続いて児玉団長からも「1994年の地震の際に支援に駆けつけたこと。その時のことがこの28年の中で最も印象に残っている。東日本大震災の際には色丹島の子どもたちが率先して義援金を集めてくれ、サハリンを通じて日赤に届いた。ありがとう。こうしたことを通じて深い良い関係ができていていると思っている。色々な問題もありますが、先日の26回目の日露首脳会談で今後も平和条約締結に向けて協議を続けていくことが確認された。また、共同経済活動実施に向けた協議も行われた。こうしたことで必ず困難な問題も解決できると考えている。外交は政府と仕事。私たちはお互いの交流を深めたい。」とあいさつがありました。

続いて、日本刀を使った居合道で日本文化を紹介。居合道は国後でも択捉でも未披露のものであり、色丹島で初披露となりました。島民の子どもも実際に居合道を体験するなどの交流も行いました。

その後、石川氏から「平和交渉について島民はどう思っているか」との質問がウーソン氏にありましたが、「外務省が進めているので自分の立場で考えをいう立場ではないのでコメントできない」とのことでお互いの立場を改めて推し量ることになった出来事でした。

その後は、アナナムラの第5消防署に移動して説明を受けました。この消防署は色丹島の消火や救助作業のための消防署で、救急車の機能は病院が担っていることなど我が国との差異も感じられました。消防車はタイヤの大きな車両が3台。おそらく冬に対応するためだろうと推測されました。スタッフは18人。緊急事態用に倉庫に必要な機材が配置されて

おり、冬用の暖房装備や飲み物や食べ物の備蓄もされていました。

消防車は 2001 年から使用ものが最も古く、水を搭載しているポンプ車で、色丹島の地中にある 100 箇所の消火栓から取水するとのこと。島内の現場への到着は 20 分以内月 1 回程度の出動があるとのことでした。

その後は高台から島内を見渡せる公園のような場所に立ち寄ったあと、昼食会場に移動し、食後は日本人墓地の墓参へ。墓地では能が参加者にとって奉納されるなど、先人に思いを馳せながら手を合わせ、領土問題の一日も早い解決と、日露両国の恒久平和、そして自由な往来が可能となる日が早期に来るようにと改めて願う時間となりました。

続いての視察は開設から 1 年を過ぎたばかりの学校へ。ナターリヤヨガイ校長と、アンナ ICT 担当サブディレクターが学校を案内。ここは色丹島の湾がよく見えるが国境警備隊があるためその方向は撮影禁止でした。現地には教育委員会という仕組みはないが、教育部が存在し、同じような役割を果たしているようです。

ここで働く教職員の職員の 8 割は生まれも育ちも地元の島で、残りの 2 割はサンストペテルグフやウラジオストクなどロシア国内各地から来ているとのこと。教員免許制度はないのですが、高等教育を受ける必要はあるため、極東の大学に行って学んで戻って来ているとのことでした。

学校の規模については、教師数は 22 人、生徒は 195 人。学年は 11 まで。1 クラスの人数は 15 人～18 人くらいで現在、特別なニーズの必要のある子どもはいないこともわかりました。

しかしながら、インクルーзив教育を基本としているので、彼らがいつでも同じような教育を受けられる用意があるとのこと、車椅子用のスロープや職員を呼べるようなスイッチ設置、エレベーターなどは標準装備されていました。最初からユニバーサルデザインなのであらゆる障がいに対応できる整備がされており、我が国の方が遅れていることが残念に感じた点です。

津波などの避難訓練は、特別な科目として年 2 回実施。教師と共に高台に避難する訓練を行う。全員で定められた特定のルートに従って避難することになっているそうです。

また、24 時間警備員を配置し子どもたちの安全に配慮しているとのこと、他にも掛け算は 1 年生から習うことや九九のようなものはあることもわかりました。

朝の登校時間は 8:30 で、給食は朝と昼の 2 回。10 時頃に 1 回、12 時に 1 回。78 人が食べることができる。朝食は大統領のプログラムと呼ばれているとのことでした。

続いて 2018 年設立の幼稚園も視察。バラバーラナターニヤ園長から説明があり、園児は 110 人で定員を満たしていること、1.5 から 3 歳までの 2 クラス、3 歳から 7 歳までの 4 クラスがあることや、スポーツ、音楽、プレイゾーンの大きな 3 つの部屋があること、プールも設置していることなどが説明されました。

また 2018 年 9 月に胆振東部地震で被災した、むかわ町へ子ども園から 5 名が訪問し、人道支援に参加したことや、水などの支援物資を届けたこと、平和と友好の印の絵も届けて来

たことなどについても説明があり、「172名の被災者が復興を遂げていると信じている。」とのお話もありました。また、幼稚園の教職員は高等教育を受け認定試験を受ければ勤務できるとのことでした。

続いての視察はスポーツ施設「シコタン・アリーナ」以前はボクシングのリングはなかったが今回新たに整備されたようです。ボクシングや総合格闘技の練習ができる環境が整っており、利用料はジムが1時間150ルーブル、体育館は1時間100ルーブルでした。

続いてを商店視察。前日の色丹島で作られている缶詰を探したところ、秋刀魚の油漬け、サケ缶、マダラの肝臓、水煮などが売っており、金額は50～100ルーブルくらいでした。また、雑貨を扱う商店では色丹島の観光スポットがプリントされたものもあり、日本人にとっても大切な場所もありました。

全般的に品物は豊富でしたが、商店街といっても個々の店舗は個人商店に少し手を加えた範囲のものにとどまっており、ここに資本投下する必要性を強く感じる状況でした。

この日の夕食は島民の皆さんとの夕食会。歌とダンスで歓迎を受けながら、隣に座ってくださった少し日本語が話せる女性と交流。結婚で島にやってきたことや、日本に行った時の感想、さらに島での生活などについてお話をさせていただきました。

色丹島を後にして船内では参加者間での報告や意見交換、交流などが実施され睡眠。

そして翌日船内での朝食後に択捉島へ。色丹島では料理班と墓地整備班に分かれバスで移動。墓地に水の入ったポリタンクを担いで登ったのちは、鎌や機械を使って草刈りを実施すると共に、倒れている墓石の復旧設置作業を実施しました。さらに復旧作業を進める班を残し、料理班に合流する者に分かれてバスで移動。

到着した先では料理班が巻きずしやチャンチャン焼きなどを作っており、島民の皆さんもそれに参加されていました。長巻きずしをつくる体験は大いに盛りあがりました。

また、ロシア版餃子のような料理「ペリメニ」食をつくる体験を訪問団はさせていただき、交流しながらおいしくいただきました。

その後、歓迎セレモニーが開催。そこでは最近の択捉島にはアメリカ、中国、韓国などから観光客が増加し、経済的な発展も進んでいること（サハリン州からの支援で航空料金が安くなっている）や、企業などとも連携しながら温泉施設や遺跡の発掘調査なども進められていること。南クリル地区に行くヘリコプターなど交通手段の整備を進んでいることや住民福祉と観光客増加を図るための施策を今後も進めていくことなどが説明されました。

続いて温泉施設へ。水着を着用して入浴するとのことで水着持参者はそこで入浴し、そうでないものは足湯を。看板犬もいるなど島民の憩いの場となっているようです。

その後は高台で見晴らしのいい公園に。写真撮影などをめいめいが行いました。

この日も船に戻って船内では参加者間での報告や意見交換、交流などが実施され睡眠。

翌日はホームビジットへ。団員2人での訪問にもかかわらず、ロシア語は出来ないということで、スマートフォンの翻訳機能と配布された会話集が頼り。到着すると民族衣装を身に着けた親子が歓迎のパンを持って出迎えてくださいました。

フレンドリーなご家族で、母親、娘、息子の妻（大学生）の3人で出迎えてくれました。今日の衣装は特別で大歓迎してくださったとのこと。日本でホームビジットをした際に、大変お世話になったので、今度はホストとして迎える側になることを決めたとのことでした。

夫は漁師をしており、今日は息子と共に漁に出ているとのこと。母親は市役所の職員でした。日本から持参したプレゼントを渡したところ、大変喜んでくれました。ご家族からお菓子やウオッカ、娘さんの手作りの品などプレゼントしてくださいました。

大学生ですでに結婚されている息子の妻によると、大学生で結婚することは島では珍しくないこと。日本の晩婚化の現状を説明すると「どうしてそうなのか理解できない」と驚いていました。大変美味しい食事をふるまってくださりながらの交流のひと時の中で、「日本にまた行きたい」ということを話されていたほか、「外国人観光客が増えてきていること」なども話してくださいました。

今回参加して、ロシア資本の投下が進む状況と、日本との交流を望む島民感情を知ることができました。領土問題の解決のためにも経済面を含めた民間交流は重要であり、今後も進めていく必要があることが理解できました。一方で、領土返還への道のりは用意ではないことも開発が進む状況をみながら感じました。政府には粘り強い交渉を求めているかなければならないと改めて感じる共に、道民の意識をさらに高める必要性を感じた訪問でした。

